Title	<図書紹介>『オセアニアの現在 持続と変容の民族誌』
Author(s)	濱嶋, 聡
Citation	大阪大学言語文化学. 2003, 12, p. 279-282
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77964
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

図書紹介

ここでは、言語文化学会員が出版に関して大きく関わった図書について、本人が紹介いたします。

河合利光　編者　『オセアニアの現在　持続と変容の民族誌』　人文書院、2002 年 3 月、278 項、2, 400 円。ISBN4-409-53026-7　(専門/人類学)

本書は、オセアニア南部諸地域の現在的社会的文化状況を、伝統の持続と変容という視点から、実地調査に基づき報告しようとしたものである。本書の出版が計画された直後の契機は、編者河合を研究代表とする、1995 年と 1996 年度の両年度に実施された文部省科学研究費補助金（国際学術研究）による共同研究「オセアニア南部首長制諸社会の持続と変容に関する文化認識論的研究」にある。この２回の調査研究では、赤道より南のフィジーを中心とする島嶼地域の首長制諸社会の実地調査と比較研究のため、本書の執筆者のうち、河合、小川、石井の３名はフィジーで、小池は西サモアで、大谷はトンガで、中山はクック諸島で調査を行った。この研究成果は、1997 年の日本民族学会でのシンポジウム「オセアニア南部首長制社会の持続と変容」（国立民俗学博物館）で報告され、さらに、そこでの議論を土台として、日本オセアニア交流協会より、英文の報告書 ”Chieftainship in Southern Oceania : Continuity and Change” として出版された。

その後、首長制とみなされる社会に限定せず、広く南オセアニア地域諸社会の持続と変容、及び現在的状況に関する、別の内容の論文集となるように再編集することが計画され、ヴアヌアツ（白川）、オーストラリア（濱嶋）、ニュージーランド（内藤）の事例が加えられた。

以上のような理由から、本書では地域的に赤道以南のフィジーを中心とする諸国に限定され、ミクロネシア、ポリネシアの赤道以北地域、及びメラネシアのニューギニア、ソロモン諸島など、多くの地域が取り上げられていない。また、フィジーのインド系住民、オーストラリア、ニュージーランド、ニューカレドニアの白人社会など、オセアニアの現在的社会を語るのに無視できない諸社会についてもほとんど触れられていない。その意味で、本書で取り上げられる課題と研究対象は、ごく一部に限られている。

まず、第一部では、伝統の原点としての歴史の創造と現在的状況の理解が共通の課題であるため、各地で書かれた初期の民族誌がそれぞれの地域の現在的状況とどのようなかかわりがあるかを、ホカート（フィジー）、クレーマー（サモア）、バック（クック諸

島）の民族誌及びその他の先行研究に対照させながら考察している。小川はホカートが記録して正統と認められていた首長系統とは異なる系統の人々が、自らの首長の系譜の正統性を主張した最近の政治抗争について報告している。20 世紀初頭に、当時のラウ首長国の中心地であったラケンバにおいて研究したホカートの調査報告は、市販されている書物でありながら、図書館での現地の人々の閲覧には許可が必要なほど記録文書としての意義をもっているという。そのことは、フィジーの人々にとって、文字化により過去を「固定化」した民族誌が、歴史文書として住民により尊重されているだけでなく、伝統と現代の間でせめぎあう、現在の生きた政治的脈絡の中で意味をもっていることを示している。

他方、小池はサモアに関するクレーマーの報告とその後に書かれた先行研究を手がかりに、自らの調査データを加えながら、歴史的過程において形成されていく政治体制の持続と変容の実態を追及している。過去に書かれた民族誌を起点として現在の状況を考察する視点は、中山にも共通しているが、彼は、マニヒキ島とラカハンガ島について 1929 年に調査したバックの民族誌の、特に首長位継承の歴史と紛争に関する記録を手がかりに、その後の状況に関して中山自身が実地調査した土地相続と首長位継承に関する紛争の現在状況とを対照させて考察している。

第２部では、政治経済のグローバル化、西洋的諸制度の導入、観光地化、異文化混合の進んだ現在のオセアニア地域の現在的状況と動態を記述分析しているが、特に住民の側からの現代の国家・社会・文化の理解をめざしている。

石井の報告するヴィティレヴ島北部のラ地方のトカイマロ地域では、都市部への出稼ぎや人口流出が顕著で、都市生活とそこから波及する消費経済の影響が、村落生活を「解体」しつつある。石井によると、植民地時代以後の国家形成の中で首長の権威は次第に衰退したが、首長制は生命、霊魂、霊力の観念に結びついた土地観念とコスモロジーに関与しているため、村落生活の精神的支柱として持続する傾向があるという。石井は、2000 年に起こったクーデターの背景にも、そのような土地観念と土地・首長制に関連するフィジー人の主張があると考えている。

そのことは、河合の報告するフィジー中部諸島の一つ、バテイキ島の事例からも支持されている。河合は、ミクロネシアのチューク（トラック）環礁において実施した調査で、伝統的知識体系と社会構成における形象認識の重要性を確認し、同様の視点から、大きく変化したフィジーの社会文化の持続と変容の諸側面を描き出そうとしている。河合によると、フィジーの文化的認識の基礎にあるのは、四隅と四辺により支えられる四角形の支え合いの隠喩的形象イメージであり、魚が頭・背鰭・胸鰭・尾鰭の四点の構成する四隅と四辺の協力により生命体として動くことができるように、世界は四隅と四辺

の構成する四角形の集積体と考えられている。河合は、このような生命観と隠喩的認識は、西洋から導入されたキリスト教の教会組織・政治組織・スポーツ組織・学校組織・村落行政組織などを受容して新たに組織化し、国家的規模の機構を再編成する際の下地にあったと指摘する。

大谷も、トンガの事例から、政治システムにおける身体の隠喩的イメージの重要性を強調している。トンガは直接的に外国の植民地となった経験はないが、現代世界システムの影響を大きく受け、人権、社会主義、社会福祉の向上を求める民主化運動が高まった。さらに学歴の重要性が大きくなり、トンガの伝統的首長制の地位の衰退と、首長と平民の地位格差の標準化が生じた。そのような社会状況下、頭・腕・足の３対の相互の相補的身体運動を強調する踊りであるラカラカを始めとする儀礼的パフォーマンスは、首長の地位を儀礼的に再生産し、その意義を再認識させる機会となっている。大谷は、音楽・舞踏・物質文化・社会組織の概念構造に頭・腕・足の３対構造が存在することを指摘し、その価値がトンガの首長制の儀礼的再生産の基底にあると考えている。第２部のいずれの論文も、変化する社会状況に適応し創造されてきたそれぞれの地域の政治文化を、新たな伝統文化の創造による外来文化との政治的対抗性よりは、地域固有の概念構造の持続性と動態の側面を強調して論じている。

最後の第３部の３論文は、現代オセアニアの、変化した、あるいは変化しつつある社会文化の状況を、医療・教育・ジェンダーといった３つの視点から追求している。

まず、白川は、ヴァヌアツのトンゴア社会における民間治療者の知識獲得の持続的側面を考察している。キリスト教が導入される以前、病気治療はナエタタムと呼ばれる岩や石に棲む精霊により、治療者の夢見を介して行われていたが、白川は、現在のナエタタムに対する見方や治療者の知識取得のあり方、及びキリスト教導入以後に顕著になった正体不明の霊と治療者との関係が、宗派の違いによって異なることに注目している。

他方、オーストラリアのアボリジニ教育について報告した濱嶋は、白人により導入されたコミュニテイ・スクール教育と、言語政策にかかわる問題を扱っている。特に北部準州のアボリジニは比較的遅くまで白人との接触も少なく独自の文化を維持していたが、近年、外界の技術的・経済的影響を受け、日常の生活面にも根本的な変化が生じはじめた。濱嶋は、白人のアボリジニに及ぼす影響だけでなく、アボリジニ同士の部族間の相互影響について指摘しているが、それは社会文化の変容は、ラジオや通信機器の導入、近隣諸民族との社会関係、自主的な出稼ぎ等による異文化体験などを含む、複雑な現象であるはずだからである。

最後に、内藤の研究は「個人史の民族誌」とも呼ぶべき視点から、マオリ女性の文化的抵抗運動、環境保護運動その他の文化的権利獲得権をめぐる動きを跡づけしている。

マオリの抵抗運動は、伝統文化の復興と新伝統創造の運動でもあり、それはマオリ文化に対する国家的レベルの政策や認識とマオリ人の利害や伝統の持続の認識とが、戦術的に拮抗し、時には協調しあう状況ととらえることができる。内藤の論文は、都市在住化と国民国家化が進み、そこに住む人々の民族的境界やジェンダーの枠組みさえ組替えられる、多文化的に錯綜した現代社会を論じるための、一つの視点を提供している。

（濱嶋　聡）